



Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2020.3) 令和元年度:27-29.

在宅療養を意思決定した患者・家族の揺れ動く心理～退院支援看護師の
関わり～

佐藤 温葉, 上西 あずさ

「在宅療養を意思決定した患者・家族の揺れ動く心理～退院支援看護師の関わり～」

旭川医科大学病院 地域医療連携室 ○佐藤温葉 上西あずさ

キーワード：在宅療養、退院支援看護師、がん終末期

【目的】在宅療養を意思決定した終末期患者家族の揺れ動く心理を明らかにし、退院支援看護師として必要な看護を明らかにする。

【方法】事例研究。本研究は、研究者の所属する施設の倫理委員会の承認を得た。

【事例提示】A氏(70歳代、男性)は、在宅で過ごし看取りは病院で主治医に行ってもらいたいと希望していた。腫瘍からの出血や疼痛増強により、一時入院となり、家族は患者の希望は叶えたいが家庭、仕事の役割が遂行できず逃げ出したくなったと涙を流していた。在宅療養に限界を訴えていたが、入院中に今後予測される身体症状の説明、本人と今後の過ごし方についての思いの共有、訪問看護師との情報共有、家族の思いを肯定する関わりをしたことで、家族は在宅療養の継続を希望された。

B氏(70歳代、女性)は、在宅療養を希望していた。訪問診療に移行予定で調整していたが、自宅での生活が困難となり入院となった。長女は介護負担が大きかったこと、予測できない病状の中、自分が意思決定しなければならないことへの重圧感を感じており、長女の決断が患者の意思と反するのではないかと困惑していた。そのため、これまでの長女の関わりや意思決定を肯定し、自宅に帰ることよりも最期の時間を過ごすことが重要であることを長女と共有した。

【考察】A氏B氏ともに在宅療養を希望し、家族は、患者の希望を叶えてあげたい気持ちと予測できない病状、介護負担、希望を叶えられないことへの自責の念、自分が療養場所に関わる決定をしなくてはならない心理的負担の中で揺れ動いていた。退院支援看護師は、患者と家族が事前に話し合えるよう予測できることを具体的に説明し支援体制を整えておくこと、家族の意思決定を支持し、患者の状態に応じた最期の過ごし方を後悔がないように一緒に考えていくことが重要である。

【結論】在宅療養を意思決定した患者を支える家族は、患者の希望を叶えたい気持ちと介護負担および希望を叶えられない自責の念、療養場所の決定をしなくてはならない心理的負担の中で揺れ動いており、その気持ちに沿った支援が重要である。

在宅療養を意思決定した 患者・家族の揺れ動く心理 ～退院支援看護師の関わり～

旭川医科大学病院
地域医療連携室
○佐藤温葉、上西あずさ

日本家族看護学会 COI開示

旭川医科大学病院
佐藤温葉、上西あずさ

発表に関連し、発表者および全ての共同発表者には過去3年間に
おいて、開示すべきCOI関係にある企業などはありません。

研究目的

在宅療養を意思決定した終末期患者が在宅療養を希望したことを家族も尊重し、患者の希望に寄り添っていたが、その経過の中で家族の気持ちに揺れが生じる2事例を経験した。



在宅療養を意思決定した終末期患者・家族の揺れ動く心理を明らかにし、退院支援看護師として必要な看護を明らかにする。

研究方法

◎研究方法：事例研究

◎倫理的配慮：本研究は、研究者の所属する施設の倫理委員会の承認を得た。

◎データ収集及び分析方法：

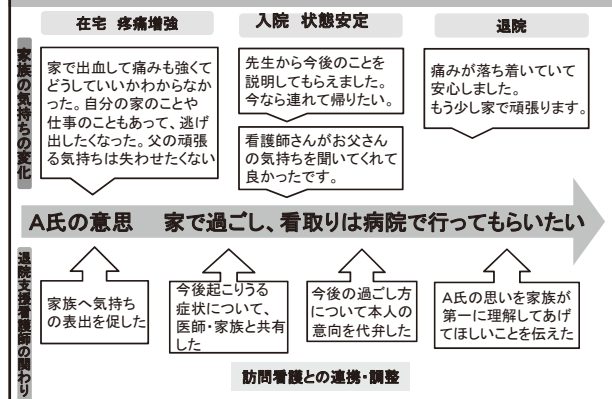
入院診療録（患者の基本情報、診察記事、看護記録）から収集した。家族の在宅療養に関する思いの変化を抽出し退院支援の関わりに沿って、家族に対する退院支援の観点から事例を分析した。

A氏 事例紹介

A氏 60歳代 男性

- ・下咽頭癌、喉頭壊死治療後（喉頭摘出）、腫瘍浸潤で右下顎骨骨折認め、皮弁部位より腫瘍の露出あり、時折出血認めていた。
 - ・予後は半年程度、本人と家族（妻・長女）には告知済み
 - ・妻と二人暮らしだが妻は転倒し骨折したため入院中。
- 市内に住む長女がキーパーソンとなり、自宅から受診同行や日常生活の支援をしていた。
- 「家で過ごし、看取りは病院で行ってもらいたい」**

A氏 経過



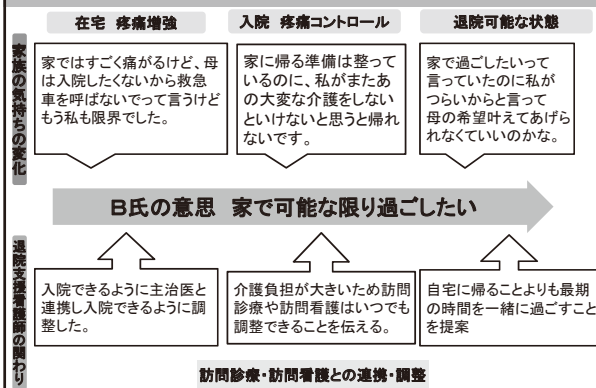
B氏 事例紹介

B氏 70歳代 女性

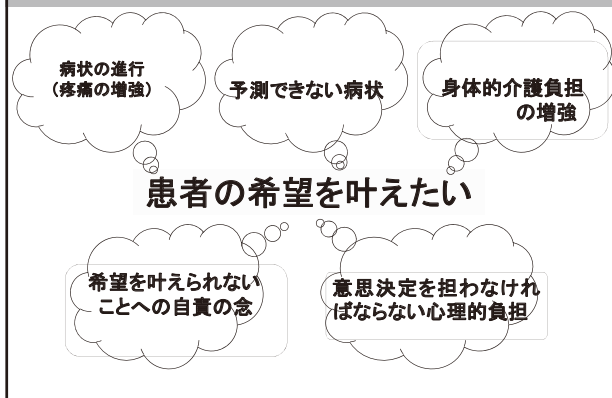
- ・直腸癌、腹会陰式直腸切除術施行
化学療法を長期間施行しイレウスを繰り返していた。
腸管腔癒あり腔から排便もあり、疼痛が増強していた。
- ・長女と二人暮らし
長女は仕事をしながらストマケアや腸管腔癒のパッド交換など全て長女が担っていた。
- ・予後は数か月、家族(長女)のみ告知済み

「家で可能な限り過ごしたい」

B氏 経過



考察



考察

退院支援看護師の関わり

- 今後予測できる患者の状態に応じた家族の介護をイメージできるよう説明する
- 残された時間をどのように過ごしていくか、患者や家族、医療者、地域支援者で事前に共有する環境を作る
- 家族の意思決定を支持し、患者の状態に応じた最期の過ごし方を一緒に考え何度も意思を確認していくことが重要である

結論

◎家族は、「患者の希望を叶えたい気持ち」・「予測できない病状」・「身体的介護負担の増強」・「希望を叶えられない自責の念」・「意思決定を担わなければならない心理的負担」の中で揺れ動いていた。

◎退院支援看護師として今後予測できる状態を説明し、どのように過ごしていくか患者・家族・多職種で事前に共有できるよう働きかけが必要である。